

# 誰でもOK 気軽に立ち寄れる居場所を

認知症カフェ「Dカフェ・ラミヨ」(東京都目黒区)を訪ねて

「認知症カフェ」とは、認知症の人や家族が集まって、悩みを相談したり介護の情報を得たりする場です。ここ数年各地で増えており、オレンジプランでも家族支援の一つとして推進されています。本人にとっても、家族同伴で立ち寄ることができ、デイの慣らし運転にもなるなどメリット大。東京都目黒区で開かれている認知症カフェ「D カフェ・ラミヨ」を訪ねました。

(編集部)

東京都目黒区の閑静な住宅街。目黒認知症家族会「たけのこ」の世話人・竹内弘道さん宅では、毎月2回、認知症カフェ「D カフェ・ラミヨ」が開かれている。自宅の2階をカフェ風に改造した。

家族会「たけのこ」は行政と協働で開催するミニデイ付家族会。竹内さんは見送ったアルツハイマーの母と一緒に活動してきた。その経験を生かし、2012年からは認知症カフェも始めている。「家族会のような場も大切だが、いつも同じ顔ぶれ、同じ話では息がつまる。カフェというスタイルで、立場や年齢に関係なく様々な人がふらりと立ち寄れる場所になれば」と、立ち上げのきっかけを語る。

参加費はコーヒー代300円。認知症の人や家族に限らず、介護を終えた人や介護職、医療職、認知症を知りたい人など誰でも参加できる。「認知症ケアや介護について語り合える開かれた場を地域の中に増やすことが、認知症の人が地域で暮らし続けられることにつながる」と竹内さん。

訪ねたのは土曜日。働いている人も

参加しやすいよう、開催は毎月第2日曜日と第4土曜日だ。この日は社会学を学ぶ学生のほか、ヘルパーや他地域の家族会のメンバーら13人が参加していた。また、「散歩の途中に立ち寄った」という近所のグループホームの入居者の姿も。スタッフと一緒に訪ね、得意の折り紙で皆を喜ばせたり、話をすることが気分転換になっているといふ。

おしゃべりに耳を傾けると、排泄ケアの相談から若年性認知症の人の支援、グリーフケアまで様々な話題が飛び交っている。時折テーブルの上のお菓子に手をのばし一息。初めて参加したという学生は「もっと暗い雰囲気だと



D カフェ・ラミヨを運営する竹内弘道さん



この日の参加者は13名。出入りは自由だ。初めて参加したというヘルパーのOさんは、介護者家族と排泄ケアについて情報交換をしていた

思っていた」と驚いていた。

集客は主に口コミだ。「区や地域包括支援センターの職員からの紹介で」と訪ねてくる人も少なくない。先日は、地域の認知症疾患医療センターの医師もやってきた。「『松沢病院 認知症疾患医療・介護連携協議会』の席でお説明したんです」と竹内さん。家族会「たけのこ」で築いたネットワークも生きている。

認知症の人と家族の会では、2012年度、計28カ所の認知症カフェの実態を調査。これによれば、認知症カフェには家族会や地域住民が集う場の発展型、施設併設型、自治体のモデル事業型など様々な形態があるとされている。運営主体もNPO法人、社会福祉法人、家族の会、市町村など様々だ。

オレンジプランでは、市町村ごと地域の実情にあった形の家族支援を進めていくことが盛り込まれている。竹内さんも「現在は自主事業だが、いずれ区の協力を得て、商店街の中に2号店を出したい」と意気込んでいる。